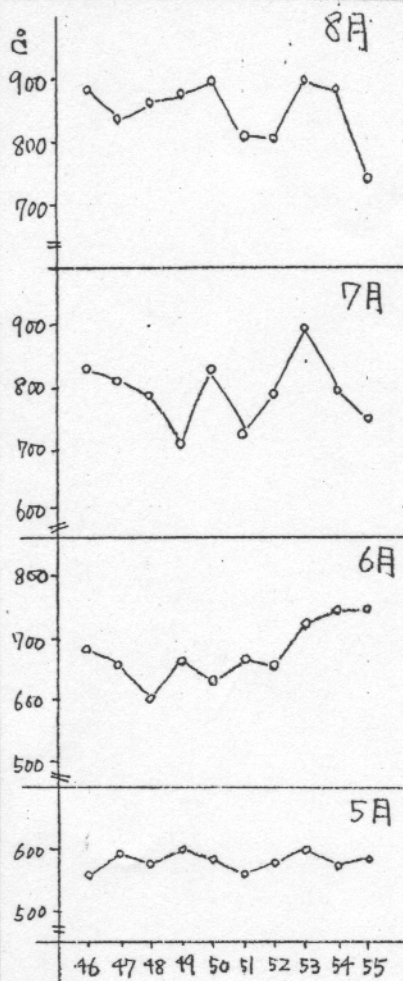


今年のエビ・ゴロ漁と夏季の
低水温との関係。

(1) 今年の水温の特徴

過去10年間の水温の変化を圖に示してあります。これから見えることは、5月は平年並に経過し、6月は過去10年間では最高値を示して、7月は7月に入ると49年、51年と同じような様子を示し、8月は、やはり異常に低い年だったといえます。表はイサザゴロ曳網による漁獲量と図1から、より詳しくみると、7月を単位面積当りの現存量に換算した月下旬から8月上旬にかけて平年だものです。この時期からみて、エビと一番水温の高い時期に今年は、水ゴロ双方とも、新エビ、新ゴロの量が急激に落ち込んでいます。



表はイサザゴロ曳網による漁獲量と図1から、より詳しくみると、7月を単位面積当りの現存量に換算した月下旬から8月上旬にかけて平年だものです。この時期からみて、エビと一番水温の高い時期に今年は、水ゴロ双方とも、新エビ、新ゴロの量を表わしているものとみまふと思

年別 場所	尾/m ²		
	52.9.4	53.9.16	55.9.10
沖宿	5	23.9	3.2
	10	7.4	2.0
大山	10.5	19.3	1.3
	3.9	6.5	0.6
三又	18.5	30.5	2.3
	3.1	13.5	1.0
手賀	44.6	38.4	2.9
	4.0	33.6	1.1
橋門		8.4	2.0
		26.3	0.9
柏崎	13.3	36.7	3.7
	2.4	15.1	1.5

(2) 今年のごろ・エビの漁獲量について

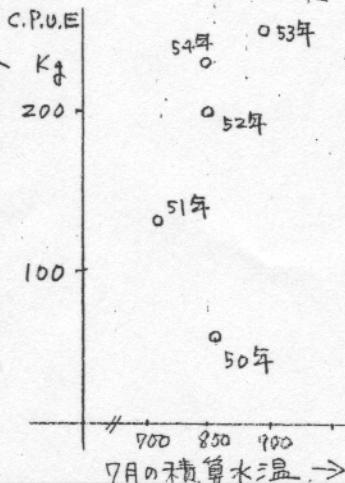
表 エビ・ゴロの密度

今年最低値を示してあり、漁業者と成りてあり、産卵期の間に取りによるエビ・ゴロの不漁平均水温が25°C以上の年と、その未満の年とでは、親エビの密度が異なります。このように新エビ・新ゴロについては、不漁ですが、5〜7月に獲れる一世代前の親エビ量は同じでも、産卵回数に差を認めてあります。従って親エビ算水温が75°Cを割ると、48年よりも親ゴロが獲れた割には、それに続く新エビ・ゴロが獲れるというふうな解をします。

(3) エビについて。
エビの産卵期の盛期は7月上旬から8月中旬までとわかれておりその間に10回と産卵を繰り返して、一尾のメスは、4〜5回の産卵を繰り返すと思われします。そして一回の産卵行為につりまの抱卵期間は、水温と密接に関係してあり、25°C以上では12〜

図- 各月の積算水温

8月中旬までとわかれておりその間に10回と産卵を繰り返して、一尾のメスは、4〜5回の産卵を繰り返すと思われします。そして一回の産卵行為につりまの抱卵期間は、水温と密接に関係してあり、25°C以上では12〜

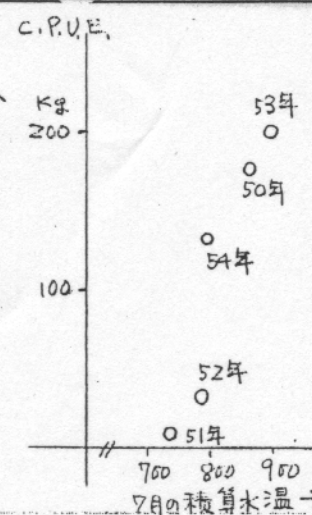


各年10月におけるゴロ漁一日一尾当たりのエビ漁獲量

てエビの資源動向を決める要因の一として水温がからんでは、ゴロの資源量に影響を与えている。たためであるかと思われ、この夏の異常気象によるものと考

(4) ゴロについて。

ゴロ(ナナブ)の漁獲量と水温との関係も次回に示します。



各年10月におけるゴロ曳一日一隻当漁獲量

この図を見ると、7月の水温と新ゴロの漁獲量との間には、相関がみられ、ゴロは低水温に影響を受けるとがわかります。しかし現在のものと

この夏の異常気象によるものと考えてよいと思われ、昭和48年ごろから相関があるようにおもわれますが、これは流入した窒素、リンが湖底に堆積し高温のときに水中に

6月中旬、遅い年で7月下旬には漁獲される新ゴロ(全長2cm前後)が今年、安がみえませんでした。

このように、比較的早い時期に獲られる新ゴロが今年現れられない原因について、7月以前に何らかの減耗要因があったものと推定されます。

又高浜人に於いては、7月下旬から8月にかけて新ゴロが大量に繁殖したという話も聞きました。以上の事実とまきとりを総合しますと、今年

のゴロの不漁は、低水温による影響

のゴロの不漁は、低水温による影響

この夏の異常気象によるものと考えてよいと思われ、昭和48年ごろから相関があるようにおもわれますが、これは流入した窒素、リンが湖底に堆積し高温のときに水中に

高温のときに水中に

増殖を加速すること

図1-4に現在の泥の窒素量を示します

したが昭和49年

この分析では

腐植質で最高

6.3 mg/g でしたから10年前との

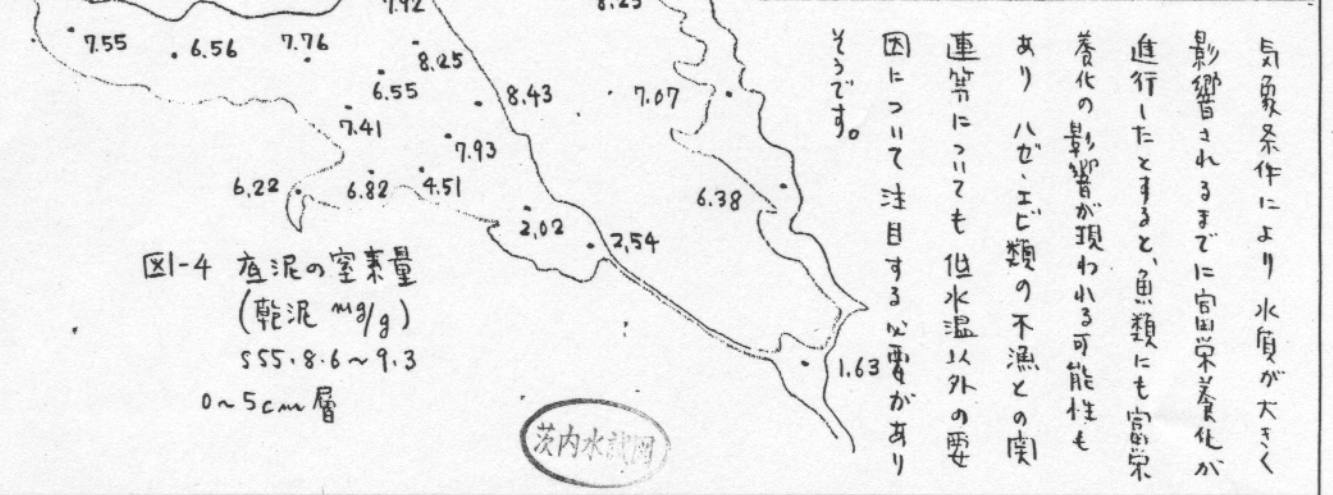


図1-4 底泥の窒素量 (乾泥 mg/g) 555.8-6~9.3 0~5cm層

茨内水鏡湖